

宇目の里に古道を訪ねて（日向往還）

戸 高 厚 司

（会員 大分市）

はじめに

佐伯市宇目（以下宇目）は大分県南部、延岡市に河口がある北川水系の源流部に位置し、地域面積の九割を山林が占める山里である。山林の大半を占める国有林は以前延岡営林署管内であったため日向方面からやって来た人達との交流が盛んだった。

旧藩時代は岡領、近年は大野郡に属し、昭和二十五年南海部郡に編入され、平成の合併で佐伯市宇目となる。

宇目には古代官道（西街道）が南北に通り、小野駅（現在の榑木・小野市付近）が設けられ駅馬（はゆま）十頭が置かれていた。官道は明治六年路線変更がされるまで豊後・日向を結ぶ主要な往還のひとつであった。

地域には三国峠・旗返峠をはじめ名のある峠だけでも二十余りあるが近年道路網の整備や自家用車の普及によ

り、かつて人馬が行き交った峠道は往来が途絶え、人々の記憶からも忘れ去られ、藪の中に埋もれてしまっている。筆者は数年前から、三国峠・旗返峠・赤松峠の旧道を歩き遺蹟調査を行っているので報告する。

官道・国道の変遷について

・ 律令の時代、豊後国より日向国への往還が通る。

・ 明治六年（1873）

梓越道が赤松峠道に路線変更される。

・ 明治十八年二月（1885）

大分―三重―小野市―重岡の路線は国道三六号線となる。

・ 明治三十五年十二月（1902）

国道三六号線は路線変更され、大分―戸次―野津市―植

松―江良―大原―赤松峠となる。

・ 以後国道三六号線は大正九年（1920）国道二号線、

昭和二十七年（1952）国道一〇号線と改名され現代

に至る。

*三国峠越の道は

・ 明治三十六年（1903）、指定解除された三国峠を越

える国道三六号線は県道延岡・三重線となる。

・昭和四十四年(1969)、県道は犬飼を起点とし三重
―宇目―北川を結ぶ国道三二六号線となる。

・昭和五十七年(1982)三国峠の下を通る三国トンネルと小木浦トンネルが開通して国道三二六号の本道となり、峠道は旧道となる。

一、三国峠(標高664m)

宇目町大字小野市字上津小野と三重町大字内山の境にある峠。峠の名の由来は岡藩・佐伯藩・白杵藩の三藩の国境に位置することによる。

・豊後国志には「戸次から三重市之郡に至る六里余、内山権嶺を経て小野市に至る四里。」とある。

・弘化二年(1845)延岡藩に招聘され三国峠を越えて日州に赴いた本草学者賀来飛霞は高千穂採薬記に当時の状況を次のように記している。「羊腸ヲ登リ原野ニ出レハ、路山背ニ有リ。実ニ馬背ノ如ク、左右ノ谷皆数十尋、谷底ヨリ火ヲ放チ枯草ヲ焼ク、炎烟行客ヲ遮ル。嶺頭ニ登レハ、石ヲ建テ、御書墓ノ三字ヲ刻ス。此嶺ヲ三国峠ト云、岡、佐伯、白杵三侯の封地ノ境トス故ニ名ク」

イ 西南戦争の遺構

明治十年六月、官軍と薩軍の間で激戦が行われた所で、薩摩軍の陣地(台場・壘)跡や薩摩軍(飢肥藩士)戦死者十一名を祀る三国神社が旧道沿いにある。また、三国神社の南方、二等三角点(664m)がある尾根の登り口には隊長山田宗賢の墓碑がある。

旧道三二六号線沿い古道登り口には歌人田吹繁子の歌碑(西南戦争の戦死者の魂を鎮める歌碑。昭和三十五年建立)が建っている。石碑には次のような銘が刻まれている。

「兵あまたいのちすてたるこの丘はいま秋草の花にうもるる」

ロ 国堺石(標柱)

三重の内山から南に、傾山から東に、宇目の酒利岳から北西にそれぞれ延びる尾根が交わる所に国堺石がある。石柱は大小二つあり倒壊して半分土中に埋もれていたが調査の為掘り起こした。



小さな石柱について、大分県文化財調査報告書 第四十六輯（歴史の道調査報告書 日向道）によると「基段は二段（かつて三段あったものと思われる）で、この上に三角状の石柱を乗せる。各面には「東 南海部郡山部村（地内）」「南 大野郡上津小野村（地内）」「西 大野郡奥畑村（地内）」の刻銘が見える。建立の時期は不明であるが、「南

海部郡」とあることから明治十一年以降であると考えられる。」とある。またもう一つの石柱には「豊州佐伯因尾村組榎峯」と刻まれている。他の面は欠損により判読出来なかった。



ハ 茶屋跡

峠には茶屋跡と云われている場所が三つある。国堺石のすぐ近くに新二朗茶屋跡と呼ばれる平坦地があり陶磁器片が散見できる。此の場所は佐伯市に河口がある番匠川水系の源流域に辺り、峠の麓旧三二六号線沿いの榎峯集落には「源流の碑」がある。

2 旗返峠(標高511m)

宇目町大字小野市字上津小野と三重町大字奥畑の境にある峠。



旗返峠を見下ろす

豊後国志には「宇目郷奥島村の東にあり、山勢險峻、紆曲盤登一里余。下り亦一里余。官道岡より佐伯に達す」とある。

寛永十年(1633)頃記された「宇目梓山之覚書」によると岡藩は竹田の岡城から日向との国境の梓山・豊後杉間十四里に一里木を設置したとあり。これによれば「六里・奥島村(宇目郷小野市組)、七里・島返し(坂下奥島の方也)、八里・宇目の内こうだうの村(宇目郷小野市組上津小野村)」と書かれている。藩侯の御郡廻りや木浦鉾山の鉾産物輸送に使われ、地元の方は今でも峠道の事を殿様道と呼んでいる。

峠の遺蹟

イ、西南戦争の遺構

峠の南側に西南戦争の時薩軍が構築した台場跡がある。

口、大乘妙典一字一石塔

正面 大乘妙典一字一石塔

右側面 奉天災消五穀豊穰國家安泰懇禱

弘化第三星舎丙午秋九月穀旦

左側面 願主 奥畑村中

庄官 榮左衛門

上津小野村中

庄官 熊三郎

八、地藏尊

石祠の中に地藏尊があるが銘がなく願主・建立年月日等詳細は不明である。

*大乘妙典一字一石塔とは經典を小石に一字ずつ書写したもの。追善、供養などのために地中に埋め、その上に年月日、目的などを記した石塔の類を建てることが多い。



二、県道七〇六号線（宇目・伏野線）

県道七〇六号線について大分県豊後大野土木事務所で見つけたところ、道路の建設の時期・経緯について記録が無く不詳であるが旗返隧道の図面があった。県道は旗返隧道の工事中に落盤事故等があり未開通で幻の県道とも呼ばれているが三重・宇目両側の隧道前までは県道として維持管理されている。



旗返隧道（三重・奥畑側）

3 赤松峠（標高402m）

赤松峠は旧南海部郡宇目町大字大平字三本にある峠。

重岡長昌寺前から南に鹿乗川を遡り、尾根を越え赤松谷を下り宗太郎に至る峠道にある。

峠については豊後国志には

「在宇目郷田野村 延亘三里 又名小梓 達日州下有水名宗太郎川 東南流入日之矢戸川」と書かれている。梓越とともに豊後・日向両国を結ぶ主要な往還の一つであった。

宇目郷案内には「国道第三六号線は南海部郡より九十折となり大原峠を攀じ上りて重岡村大原に入り赤松谷を宗太郎川に沿いて宮崎県延岡に至る郷内延長距離は三里強なり」と書かれている。

峠周辺の遺蹟

イ、西南戦争の遺構

峠周辺には西南戦争の時構築された台場が多数点在する。明治十年五月十二日、峠を越えて重岡に薩摩軍が進入してから、八月十五日西郷軍が日向可愛岳に後退するまで両軍の間で激しい戦闘が行われた。

ロ、石像地藏菩薩座像群



赤松峠西方、山頂（481m）にある地藏菩薩像群

赤松峠から南東方向、赤松谷右岸尾根（通称トヤの尾根）に行く旧道沿いの山頂（481m）にあり赤松峠を見

下ろすように鎮座している。

石造地藏菩薩坐像群は四軀ありその内二軀は肩から上が欠けており、そのうち一つは台座の脇にあったがもうひとつは発見できなかった。南から二番目の石造の台座に次のような銘が刻まれていた。「世話人 柴田ヨシ・安東ヨ□」年代は不詳。近くには半分土中に埋もれた石灯籠一基(宝珠・笠・火袋その外は欠損)と手水鉢がある。

ハ、石造舟形光背付地藏菩薩坐像

鹿乗集落から川の左岸沿いに市道(重岡・中二宮線)を南進すると右に作業道が分かれる所に鎮座している。この石像は山主が作業の時、土中に埋もれていた石像を偶然発見して現在地に安置したと聞いている。元々は古道沿いにあったと思われる。地藏尊の後方の尾根筋に古道があり辿ると市道と合流する。

光背には次の銘が刻まれている。正面に向かって

右側、六月十五日 宗助

左側、天保十五辰年



*地蔵菩薩とは

日本においては、浄土信仰が普及した平安時代以降、極楽浄土に往生の叶わない衆生は、必ず地獄へ堕ちるものという信仰が強まり、地蔵に対して、地獄における責め苦からの救済を欣求するようになった。

姿は出家僧の姿が多く、地獄・餓鬼・修羅など六道をめぐりながら、人々の苦難を身代わりとなり受け救う、代受苦の菩薩とされた。

二、山神宮石碑

山神宮石碑（1）

鹿乗集落からの市道が尾根道となり南西方向に転じる
 辺りに赤松谷左岸尾根の豆殻峠（まめわらとも云う）に通
 じる徒道がある。山神宮は分かれの尾根に鎮座している。
 石碑は二つあり、台座にそれぞれ次の銘が刻まれている。



右	安政四年 丁巳吉日
	鹿乗 中ノ口
左	平野
	明治廿四年 十二月
	願主 (以下判読不能)

山神宮石碑（2）

赤松谷右岸尾根（赤松古道）の頂部近くの尾根筋にあ
 り、石碑には次の銘が刻まれている



	安政二年
山神宮	
	十一月□欠損
渡辺	松岡

*山の神とは

山を守り、山をつかさどる神。また、山の精。民間信仰
 では秋の収穫後は近くの山に居り、春になると下って田
 の神になると云う。

また山の神の石碑は山主が山で怪我をしないように、木が大きく育つようにと願いを込め自分の山に向けて石碑を建立すると云われている。

ホ、記念碑

鹿乗天満社から鹿乗川に沿い市道(重岡・中二号線)を南進すると取水堰があり、右岸の取水口の脇に石碑が建っている。碑文には明治六年に豊後日向本道が梓峠から赤松峠に変更されたことが書かれている。石碑の銘は一部未解読である。



越を廃し自今赤松越を以て本道と定候條此旨布告候事」

(明治六年布告類編第三百八十号十一月十五日)

おわりに

現在峠道周辺の多くが杉・檜の植林地になっている。現地を歩いてみると植林地の中は表土が薄くまた作業道が建設される等して道筋が不明瞭である。

一方雑木林の中の峠道は藪に覆われ歩き辛いのだが足裏で感じる道筋は明瞭で数百年の歳月の重みを六感を通して伝えてくれているようである。

参考資料

- ・大分県文化財調査報告書 第四十六輯(歴史の道調査報告書 日向道)
- ・豊後国志 附・箋釈豊後風土記 著者 唐橋世済 纂輯
- ・高千穂探葉記 賀来飛霞
- ・宇目町誌
- ・宇目郷案内 大正十一年刊
- ・宇目梓山之覚書 中川家文書

*参考史料

「西海道豊後国より日向国への往還重岡駅熊田駅の間梓

第1図 江戸時代中期の宇目郷内道路網



宇目町誌から転載